

十七世紀清朝帰属時のハルハ・モンゴル

宮 脇 淳 子

はじめに

満洲族が一六三四年内モンゴル各部を征服したのに対し、外モンゴル・ハルハ（喀爾喀 Qalqa）は一六八八年ジョン・ガルのガルダンの侵入を受けて清に降るまでのおよそ五十年間、漠北の地に在って一応の独立を保っていた。ロシアのシベリア進出は十七世紀に入って盛んになり、五十年を過ぎると清との関係が緊迫化して露清国境で紛争を惹起するに至った。露清間に位置していたハルハはさらに、西隣で擡頭しつつあったオイラットのジョン・ガル部の圧迫をも受けねばならなかつた。当時の露清関係については多くの研究があるが、元朝の唯一の後裔をもつて自任していたハルハ・モンゴルが独立を失うに至つた過程に焦点を当てた専門的研究はほとんど見られない。

我が国の通説では、ハルハの清朝帰属にあたつてジョン・ガルのガルダンがハルハに侵入してきた時、ハルハ王公大會議が開かれ、席上ロシアに依るべきか清朝に依るべきかが議論されたが、大ラマ・ジョブツンダンバ・フトクトウ（哲布尊丹巴呼圖克圖 Jebjundamba Qutuwtu）が、ロシアは仏教を奉じていず風俗も異なる、しかし清朝は仏教を崇敬しているから我々はこれに依るべきであると主張して、ついに清朝の保護を請うたと言われてい

る。しかし、あらゆる点から考へてこれは史実に基くとは言い難い。

そこで、この問題の解明のため、当時ハルハは東西＝左右翼に分裂していたこと、左翼はすでに帰属前から清と密接な関係を持ち、ロシアと敵対していたこと、ガルダンの侵入時ハルハでは王公大会議を開く余裕のなかつたこと等を、章を分けて証明していただきたい。

1

清朝側の記録に初めてハルハが現われるのは一六三五（天聪九）年のことである。この年ハルハの中では最も東にその領域を持つチョチョン・ハーン・ショロイ（車臣汗頑墨 Čečen qan Šoloi）が、ウジュムチン（烏珠穆沁 Üjümüčin）・スニット（蘇尼特 Sönid）等内蒙諸部の長とともに清朝に上書通好し、駝馬を貢じた⁽¹⁾。ハルハの中央に位置するトウシム・ハーン・ガンギ（土謝图汗噶布 Tüsüyetü qan Gömbü）は、一六三七（崇徳二）年にチヨン・ハーンとともに初めて清に上書通好し、翌年には駝馬・貂皮・鷺の羽・ロシアの銃等を献上した⁽²⁾。ハルハの中でも西方に領地を有していたジャサクト・ハーン・スブディ（札薩克图汗素由第 Jasaqtu qan Subudi）は、一六三八（崇徳三）年内蒙の帰化城を掠めたという理由で清帝の親征を受けており、清朝への朝貢も三ハーンの中で最も遅れて行なわれた⁽³⁾。

これら三ハーンの存在と一六九一年の清朝帰属後の状態より推察して、当時のハルハは三ハーン部に分かれていたと一般に考えられているが、これは事実とは異なる。以下に私見を述べたい。

一六四六(順治三)年五月丁未、内蒙スニット部のテンギス(騰機思 Tenggis)、テンギステイ(騰機特 Tenggistei)が各々の部を率いて反乱を起し、ハルハに逃れるという事件が勃発した。皇朝藩部要略卷三によると次の如くである。

順治三年、車臣汗碩墨誘蘇尼特部長騰機思叛、予親王多鐸率師追剿、至札濟布喇克。碩墨遣子本巴等、土謝団汗袞布遣其屬喇瑚里等、合丹津喇嘛兵五万余、援騰機思。大軍敗之、棄駝馬而竄。有楚琥爾者、袞布族也、復私掠巴林部人畜。

ハルハのダンジン・トマ(丹津喇嘛 Danjin blama)は、トウショートウ・ハーンと同様、ゲレンセンジヒ(格埒森札 Geresenje)の第三子の子孫であり、ハルハの清朝帰属後一七二五(雍正三)年に増設されたサイン・ノヤン(賽因諾顏 Sayin noyan)部の祖である。

ハルハの乱は清朝によつて鎮圧され、一六四八(順治五)年テンギスの弟テンギスティは清に降つた。⁽⁴⁾この時清朝はハルハの領主たちの子弟を来朝させようとしたのであるがハルハは従わず、バーリン(巴林 Bararin)部の人畜もハルハに帰したままで、その後も清に返還されなかつた。結局、一六五五(順治十二)年に至りて、清朝側はバーリン部落の欠少人畜を不問に付すことを条件として提示し、ハルハ各部の子弟を来朝させたのであつた。やがて同年、清朝は宗人府で会盟してハルハハジャサク(扎薩克 jasak)を設け、これを左右翼に分けた。これで設けられたハジャサクとは、御製親征平定朔漠方略卷一、十三頁によるべく、

土謝団汗・車臣汗・丹津喇嘛・墨爾根諾顏・畢希勒爾団汗・羅ト藏諾顏・車臣濟農・昆都倫陀音

の八人である。康熙大清会典卷一百四十四によると、このハジャサクは次のように定められている。

順治十二年題准、喀爾喀八札薩克毎年進貢白駝各一匹、白馬各八匹、照例各賞、給銀茶桶茶盆疊緞緞布等物。

ジャサクとは、この時点までは内蒙四十九旗に於て、一旗の長として世々その領地と人民を治める者に清朝が与えた称号である。この称号がハルハの領主達に与えられたということは、換言すればハルハが清の秩序下に組み込まれようとしていたということに他ならないのであるが、ここではまずこの八人のジャサクの出自について考えてみたい。

田山茂氏は、このハジャサクを蒙古游牧記によつて後世の各旗の祖先であるとし、各ハン部に二人ずつ分けられるとしている。⁽⁵⁾

土謝団汗……土謝団汗部汗旗の祖

丹津喇嘛……賽因諾顏汗部汗旗の祖

墨爾根諾顏……
左翼中旗の祖

羅ト藏諾顏……
左翼左末旗の祖

車臣汗……車臣汗部汗旗の祖

希畢勒爾圖汗……札薩克圖汗部汗旗の祖

車臣濟農……
中後旗の祖

昆都倫陀音……
左翼左旗の祖

この中で、車臣濟農と羅ト藏諾顏は誤りである。この時のハジャサクは、ハルハの左翼四人、右翼四人に与えられたものであつて、後の三ハーン部とサイン・ノヤン部（これはハーン部と呼ばない）と直接の関係はない。欽定外藩蒙古回部王公表伝を参考すると、実際には次の如くである。⁽⁶⁾

左翼

土謝団汗 Tüsiyetü qan……土謝団汗部土謝団汗行旗の祖

車臣汗 Čečen qan……車臣汗部汗旗の祖

丹津喇嘛 Danjin blama……賽因諾顏部賽因諾顏旗の祖

墨爾根諾顏 Mergen noyan……土謝団汗部左翼中旗の祖

右翼

畢希勒爾圖汗 Bisireltü qan……札薩克団汗部汗旗の祖

羅ト藏諾顏 Lobsang noyan……札薩克団汗部中右翼末次旗の祖

車臣濟農 Čečen jnong……札薩克団汗部左翼後旗の祖

昆都倫陀音 Kündölen toyin……札薩克団汗左翼左旗の祖

つまり、清朝帰属後左翼がひはムウ・シヨートウ・ハーン部、チュチョン・ハーン部、サイン・ノヤン部の三部が設けられたのに対し、右翼からはジャサクト・ハーン部ただ一部が設けられたのにすぎなかつたのである。これは清朝帰属時の状況に由来するものであるから詳細は後に述べるが、帰属前は清朝側も左右翼を均等に扱っていたと考え得る。さらにこれを裏付ける史料を挙げる。

清朝は一六八二（康熙二十一）年、三藩の乱を鎮定したことにより、オイラットとハルハに賞賚を加えた。この時ハルハの中で清朝が正式な使者を遣わした王侯は以下の通りである。

左翼

土謝図汗

*沢ト尊丹巴胡土克図 Žebjundamba Qutužtu

車臣汗

額爾克戴青台吉 Erke dayičing tayiji……丹津喇嘛の孫
墨爾根台吉……前述の墨爾根諾顏と同じ

右翼

札薩克図汗 Jasaqtu qan……畢希勒爾図汗の息子

*益楚克台吉 Pungčuγ tayiji

厄爾德尼濟農 Erdeni jinong……車臣濟農の従兄弟

色冷阿海台吉 Sereng aqai tayiji……昆都倫陀音の息子

*達爾瑪希里 Darmasiri tayiji

羅ト藏台吉…前述の羅ト藏諾顏に同じ

一六五五年に設置されたハジャサクは、息子や孫が後を継いでそのおまゝの中に含まれており、その他に新しく左翼に一人、右翼に二人加えられている。

また一六八六（康熙二十五）年には、清朝はハルハ左右翼の不和を調停するため理藩院尚書阿喇尼に命じてハルハに赴かせ、左右翼のハーンを召して会盟させようとした。この時正式に使者が遣わされた王侯も、右とほぼ同様

十七世紀清朝帰属時のハルハ・モンゴル 宮脇

である⁽⁸⁾。

以上のことより、ハジャサク及びその後のジャサクはハルハの左右翼に均等に設置されていたことがわかる。ハルハの清朝帰属は一六八八年のことであるから、その直前まで左右翼が一応対等に存在していたと考え得る。

田山氏はハジャサクの設置について、ハルハがもと「七ホシューン」と呼ばれたことから、必ずしもジャサクはホシューンの長ではなく、何れかのホシューンに二人のジャサクが設けられたことになるのではと疑問を呈しておられるが⁽⁹⁾、この「七ホシューン」の起源は、ゲレセンジエの七子にハルハが相続されたことに由来する⁽¹⁰⁾。王公表伝によると、七子のうち長子・次子・四子・七子の子孫はハルハ右翼に属し、三子と五子の子孫が左翼に属していることがわかるが、六子の子孫はこの時代ただ一人として史料に現われない。しかも、ハジャサクのうち二人はゲレセンジエの長子の子孫に、三人は三子の子孫に、残る三人はそれぞれ次子・四子・五子の子孫に与えられている。このことからも、当時すでに「七ホシューン」とは名目のみであったことが伺われるのである。

ゲレセンジエの後裔という意味からは、ハルハにはハジャサクと並び得る王侯が数多く存在し、彼等は各々固有の称号を有していた。清朝側が如何なる基準に拠ってハジャサクを任命したのかは、遺憾ながら現時点では解明できないが、これは当時勢力のあった王侯を懷柔する意味を持つものであつたろうから、彼等の勢力が他より優つていたということだけは言えるかと思う。

以上のことから明らかなように、「ハルハ三ハーン部七ホシューン」という名称は、清朝帰属前の実際のハルハの内部情勢を反映していたとは考えられない。清朝側がハルハに対して常に左右翼で分け、左右対等になるよう計

らったのは、当時のハルハが実際に左右翼に分かれていたことに拠ると考える方が自然である。事実、十七世紀後半ハルハは東部と西部に分かれて争うようになつていったのである。

一一

一六六二（康熙元）年、ジャサクト・ハーン・ノルブ（諾爾布 Norbu）の跡を継いだその子ワンチューク（旺舒克 Vangčug）を、同族の第三代アルタン・ハーン・エリンチン（額琳沁 Erinčin=前述の羅ト藏台吉）が襲殺するという事件が起こつた。トウショートウ・ハーン・チャグンドルジ（察揮多爾濟 Čajun dorji）とダンジン・ラマの兵がエリンチンを撃つたため、エリンチンはオイラットに逃れた。この紛争で、ジャサクト・ハーンの多くの属衆が難を避けてトウショートウ・ハーンに帰したのである。ジャサクト・ハーン位は、殺されたワンチュークの兄であるチュー・メルゲン（綽墨爾根 Čuu mergen）がついで自らハーンを称したが、ジャサクト・ハーンの属衆はトウショートウ・ハーンに帰したままであった。この事件より八年後の一六七〇（康熙九）年、清朝側はジャサクト・ハーンを自称するチュー・メルゲンが清に朝貢しなかつたのを理由に、新たにワンチュークの弟チエングン（成袞 Cenggün）をジャサクト・ハーンに封じた。チエングンは散逸したジャサクト・ハーン部の属衆を集めようとしたのであるが、それでもなおトウショートウ・ハーンに帰したジャサクト・ハーン部の衆は戻らなかつたのである。⁽¹⁾これが発端となつてハルハは分裂し、内部紛争は甚しくなつていった。このハルハの内乱は、一大遊牧帝国の建設を企図していたガルダンにとって絶好の機会であった。しかしてトウショートウ・ハーンもまた、自分を首長と

するハルハ統一を目標に勢力を蓄えつあったのである。

ハルハとオイラットは、一六四〇年には清朝の脅威に対抗するためモンゴル・オイラット會議を開いたが、この會議の提唱者はジャサクト・ハーンであった。⁽¹²⁾ところが同族のアルタン・ハーンが当時のハルハで唯一ロシアと使節を交換し、強力な勢力を持つに至ったため、ジャサクト・ハーンの統率力は弱くなつていつた。右翼の領域は清朝から遠く離れていたため王侯達の動向はほとんど清朝側の記録に残らなかつたが、彼等は常に西隣のオイラットと深く接触し、トウシエートウ・ハーンによるハルハの統一を心よく思わなかつた者もいたことは間違いない。

一方、ハルハ左翼はトウシエートウ・ハーンを中心として結束力は強かつた。清朝の設置したハジャサクのうち左翼はトウシエートウ・ハーン、チエチエン・ハーン、ダンジン・ラマ、メルゲン・ノヤンの四人であったが、一六四六年のスニット部の反乱を助けたハルハ軍は、トウシエートウ・ハーン、チエチエン・ハーン、ダンジン・ラマ等によるハルハ左翼連合軍であつた。一六六二年にジャサクト・ハーンを殺したエリンチンを撃つたのも、トウシエートウ・ハーンとダンジン・ラマの軍であつた。メルゲン・ノヤンは、トウシエートウ・ハーンの一族で後のトウシエートウ・ハーン部左翼中旗の祖であることから、やはり彼等と行動を共にしていたと考え得る。トウシエートウ・ハーンとチエチエン・ハーンの結びつきはかなり緊密なものであつたようで、トウシエートウ・ハーン・ゴンボの息子がのちハルハを率いる大ラマとなる初代ジエブツンダンバ・フトウクトウになつたのも、チエチエン・ハーンが大いに関係していた。

ジエブツンダンバの伝記によると、一六三五年トウシエートウ・ハーンの妃の懷妊の際、チエチエン・ハーンは

トウシヨートウ・ハーンに礼物を贈り次のように述べたといふ。

チングス・ハーンの子孫たる我等を統御すべき好漢の汝より生まれんとするには、余の常に思うて止まざる所なり。

そしてエチョン・ハーンは彼に宝石で飾った振り籠を贈り、後にこの嬰兒が突然出現した三人のインド人を知つてでもいるかの如く振舞つたという奇瑞により、自分のゲゲーン（格根 gegen—光明の意）の称号を嬰兒に与えて、

将来のラマたるべき嬰兒は以後ゲゲーンと称すべく、ハーンは自ら單にエチョン・ハーンと称すべし。
と言つたといふ。⁽¹⁴⁾

一六三八年、ジョブシンダンバは或るラマ僧によつて最初の戒名を与えられ、翌年五歳の彼はハルハの諸部族によつてシレートウ・ノール (Siregetü Nañur) に招かれ、出家 (rab-byung) の戒を受けた。この時彼は、ロプサン・ダンビ・ジアルツァン (Blo-bzang bstan-pa'i rgyal-mtshan) と名づけられたといふ。ハルハの人達は皆この新ラマに礼物を獻納し、諸王は各々管下の人民の中より數帳幕を割いて彼に献じた。これがシャビナル (śabina = 徒僧) の新所管の起りの発端になつたと言わねどいふ。

一六四九(順治六)年夏、このトウシヨートウ・ハーンの次男のラマ僧はチベットへ向けて出發した。彼はパンチエン、ダライ両ラマに宗教法戒を授けられ、半年間ボタラに留まり教義を修めた。第五代ダライ・ラマは、このラマ僧をターラナータ (Taranātha) の転生 (qubil'an) であると宣証し、彼にジョブシンダンバ・フトウクトウの称号

を与えたといふ。ショブソン rje-btsun はチベット語で尊者を意味し、ダンバ dam-pa は正しき者、フトウクトゥ qutuγtu はモンゴル語で元来聖者の意であるが、専ら代々現世に転生し来たるラマであることを政府より承認せられたる者という意味で用いられた。ショブツンダンバはチベットに留まつて更に教義を完修したいと請うたが、バンチヨン、ダライ両ラマは彼がハルハに帰つてラマ教を弘布し寺廟を建立する方が衆生にとつては利益であると答えたと⁽¹⁶⁾いう。

この後チベットのラマ僧を伴つてハルハに帰つたショブツンダンバは多くの寺院を建立し、一六五五(順治十二)年には再度チベットに赴いた。一六五九(順治十六)年、ショブツンダンバはハルハのオルジヨイトウ・チャガーン・ノール(額爾哲伊圖察罕泊 Öjeyüü Čaaran Nañur)にノヤンと俗衆を集め、念經に列せしめ法戒を与えたといふ。これが「白池講經」と呼ばれるものであり、この集会に於てショブツンダンバはハルハの諸王及びラマに尊号を与えたと言われているのである。⁽¹⁷⁾ ウラジミル・ショフもこれを指して、

政治上の情勢から、ハルハ諸侯、殊に東部の一ハーン國に属する諸侯は、自己の同族たるフトウクトゥを最高の君主^{ハルハ}首領と見、殆んど全ハルハのハガンとも見るに至つた。

と述べている。⁽¹⁸⁾

ウラジミル・ショフがいみじく述べたように、ショブツンダンバは「殊に東部の一ハーン國に属する諸侯」つまり左翼の王侯たちの上に大きな影響力をを持つに至つたが、「殆んど全ハルハのハガンとも見る」ことを望んだのはトウシエートウ・ハーン率いる左翼の王侯たちであつて、ジャサクト・ハーン以下の右翼の王侯たちはこれに熱心

に賛同したとは考えられない。初代ジェブツンダンバは後代の転生者の中でも最もすぐれた人物であったと言われているが、彼が実際にハルハを率いる首長となるのはハルハの清朝帰属後のことである。彼が勢力を有するようになった背景には、ハルハを統一しようとするトウシニートウ・ハーン、チエチエン・ハーンの計画があり、次にチベットのゲルグ・パ弘通のための政策があり、さらに清朝のハルハ統治政策に好都合であったからであると思われる。

以上のことから、封建諸侯が群立していた十七世紀のハルハに於ても、左翼のトウシニートウ・ハーンを中心として新しい統一の動きが見られたことがわかる。しかし、これに素直に応じられなかつたハルハ右翼の王侯は、ハルハ左翼とジュー・ガルの間で混乱を深めていった。さらに、露清間にあつて、ハルハは内部の問題にまで干渉を受けるようになつていつたのである。

三

十七世紀後半、黒竜江地方をめぐつて露清は幾度も外交交渉を行なつたが、この間ロシアは着実にザバイカリエに進出していいた。一六六五年にはセレンガの寨、つまりセレンギンスクが、六六年には後にウェルフネウジンスクとなつたウダの冬舎が建設された。

このザバイカリエ一帯には、元来モンゴル系のブリヤート人とツングース系のエヴェンキ人が住んでいた。『ブリヤート蒙古民族史』によれば、当時ブリヤート人は毛皮用野獸と家畜等をモンゴル及び中国へ出し、銀やその他綴

子・南京木綿・絹地・金属製品等の商品を中国から仕入れていたという。一方モンゴルのハーン達は、ブリヤート人を自己の貢納者と見做していた。ザバイカリエのブリヤート人の中で、アタガン族の先祖の一人はハルハのトウシエートウ・ハーンから戦場での胆力と機敏さを認められて「ホシグチ *Qosiguci*」（旗の軍司令官の意）なる尊称を受け、他の一人の先祖ウドウン・ウルゼイトイトウは、トウシエートウ・ハーンの息子の一人を養育する義務を遂行したため尊称を与えられたという。しかし、この本の著者クドリヤフツェフは次のように述べている。

或るブリヤートの公侯等はモンゴルのハーン等に対して臣下的依存関係にあつたと考えられるが、ブリヤート国はまだ彼等の所有地ではなかつた。⁽²⁰⁾

ハルハの王侯たちはロシアの防人の挙動にさして注意を払わず、彼等にザバイカリエに於ける築城の隙を与えてしまつた。しかし後に至つて、これら王侯はブリヤート人並びにエヴエンキ人を自己のヤサク貢納者に戻そと手を尽し、ロシアのザバイカリエ進出に対して再三抗議を行なつたのである。⁽²¹⁾

一六六四年以降、ハルハの王侯は何度もロシアに抗議の使者を送つていたが、一六七二年トウシエートウ・ハーン（オチロイ・サイン・ハーン）は初めてモスクワに使節を派遣した。ロシア政府のモンゴル人との交渉に関する報告は、ロシア外務省公文書の中に残つている。トウシエートウ・ハーンの四条から成る手紙の要約は次の如くである。

一、モスクワからツアーリの勅書を持った公使を派遣してほしいというトウシエートウ・ハーンの請願。

一、^ヘ友愛を以つて平和裡に^ヘ生活すること、辺境軍がトウシエートウ・ハーン及び彼の兄弟と戦争しないよう

との提案。

一、ヘ如何なる指令で、また誰の命令によつてツアーリの勅書も持たない使節がセレンギンスクから到着するのか／＼明らかにするようにして、ハーンの主張。

一、ヘムンガル人の土地／＼の上にセレンギンスクを建設した問題と、セレンギンスクの住民をヘ他の場所に／＼移住させるようにとの要求。

手紙は次のような確認で終わつてゐる。

今、彼等は彼等と和合して暮らしており、双方の間には何の侮辱もない。将来、彼等は彼等と何の侮辱もない限り、和合して平和裡に暮らすであろう。もし悪いことがあれば、彼等は彼等と争うだろう。

これまで、セレンギンスクからモンゴルの公侯に対してへたびへたび／＼彼等を中国へ通過させるようにとの依頼を持った使節が到着したが、トウシェートウ・ハーンはヘセレンギンスクの寨は彼等がツアーリの許可を得ずに勝手に建てたと見做し、如何なる点に於ても彼等を信用しない／＼という口実ですべて謝絶していた。しかしハーンは、もしツアーリから派遣されたのであれば、ヘ大使或いは公使或いは商人達／＼を中国へ通過させるつもりであると、この時トウシェートウ・ハーンの使者は伝えた。⁽²²⁾

この後トウシェートウ・ハーンに対してもツアーリの勅書を携えたペルフィリエフが派遣されたが、ハーンはチベットに赴いていたため会見できず、彼はハーンの側近者たちと交渉した。モンゴルのザイサン達はロシアの大天使に一連の抗議を提出した。

一、ロシアのツァーリがヘ彼等の太古からの民を不當に手に入れた∨こと。

一、ヘセレンギンスクの寨を彼等の領地の上に建てた∨こと。

一、ヘネルチンスクの寨からのロシア公民が、彼等の民を殺し、略奪した∨こと。

これに対してペルフィリエフは、ザイサン達が自分達のヘ太古からの民∨と呼んでいる人々は既にヘ五十年以上も∨前からロシアにヤサクを支払つており、ヘセレンギンスクの寨はツァーリに税を納めている人々がモンゴル人から辱しめられないようモンゴル国の近くに建てられたのであって、モンゴル人はこの寨から如何なる圧迫も受けない∨と答えたといふ。⁽²³⁾

トウシエートウ・ハーンはさらに一六七五年にもモスクワに使節を派遣したが、この時の使節団にはジェブツィンダンバからの使者も含まれていた。モンゴルとの外交関係の維持はロシアにとっても必要なものであつたから、使節はロシアに心よく受入れられたが、起こつていていた問題には何の解決も見出せなかつたのである。

一六八一年九月から、ハルハの小部隊がザバイカリエのロシアの拠点に攻撃をかけ、一六八四年にはトゥンキンスクの谷ヘチエチエン・ノヤンとシプタル・バートウルの一万の軍が侵入した。しかもこの間一六八二年から八三年には、エリケ・フンタイジ、エルデニ・フンタイジ、メルゲン・アハイ等八人のモンゴル公侯からの使者がイルクーツクに到着し、平和関係の確立や商業交易の再開について交渉した。シャステイナ氏はこれを指して、「トウシエートウ・ハーンのような強大な領主達はロシアに対し公然と敵意ある態度を示していたにもかかわらず、若干のモンゴル諸侯はロシアに対し親密であったことを証明している」と述べている。⁽²⁴⁾

しかし、大国間に狹まれた人々が隣国に友好使節を送るのは自然であり、ここではむしろトゥンエートウ・ハーンが終始一貫してロシアに抗議を行つてゐることに注目すべきである。彼は、第三勢力であつたハルハの中で、当初から清朝側に傾いていたのである。

清朝は一六八一年ようやく三藩の乱を鎮圧し、北方問題に焦点を当て始めた。翌八二年にはオイラットとハルハに賞賛を加え、八三年になつて初めてハルハとの境界について明確に定めようとした。⁽²⁵⁾ 事の起こりはトゥンエートウ・ハーン、チエチエン・ハーンが自ら哨兵を置くことを拒否したからであるが、このことからも清朝が特に北方の辺境防衛に対して積極的な姿勢を示すようになったことが伺われる。しかし、清朝は辺境防衛のため配下の兵をハルハに入れる意図はなく、あくまでハルハ人自身に防衛させるつもりであった。⁽²⁶⁾

ハルハ内部では、一六八二（康熙二十一）年、ジャサクト・ハーン・チエシングンがトゥンエートウ・ハーン・チヤグンドルジが以前より匿して返還しない人民を戻すように申し入れた。しかしトゥンエートウ・ハーンの態度は変わらない。そこでダライ・ラマが調停に乗り出しが、トゥンエートウ・ハーンは耳を貸さず両者の不和は益々甚しくなつていった。この頃ロシアに対しても慎重かつ計画的に事を運んでいた康熙帝は、ハルハの両ハーンの不和に対しても無関心ではいなかつた。一六八四（康熙二十三）年二月には内大臣アチト・ゲロン（阿齊圖格隆）を遣わし、ダライ・ラマの使者セムパチエンボ・フトウクトゥ（参巴陳布呼國克圖）と共に漠北へ赴かせた。しかし、ダライの使者は帰化城で病死し、アチト・ゲロンも効の無いまま引き揚げたのであつた。⁽²⁷⁾ しかし、康熙帝はあくまでもハルハの内乱を益ならずと考え、これを調停しようとした。一六八六（康熙二十五）年四月、帝はついに理藩

院尚書アラニ（阿喇尼）を遣わし、ダライ・ラマの遣わしたガンデン寺の座主（噶爾丹西勒圖 Galdan Siregetü）と共にクレーン・ベルチル（庫倫伯勒齊爾 Küriyen Belcır）地方に赴かせり、トウシヨートウ、ジャサクト両ハーンを召して会盟させようとしたのである。⁽²⁸⁾

同年、ガンデン寺の座主がクレーン・ベルチルに到着する前に、ジャサクト・ハーン・チヨングンは死んだ。それでその子シャラ（沙喇 Šara）がジャサクト・ハーン位を繼承し、アラニに従つてクレーン・ベルチルに来た。藩部要略によると、トウシヨートウ・ハーンは盟に来て、代理に弟のジョブツンダンバを寄越しただけであり、さらに彼は盟の約束であったジャサクト・ハーンの逃衆も僅かにその半分を返還したにすぎなかつたという。またジョブツンダンバはクレーン・ベルチルの会盟に勢力を振い、ダライより派遣されたガンデン寺の座主と共にハルハ諸王に和解するよう説教し、将来必ず紛争を絶ち親睦を守ることを誓わせたということである。この盟に於てジョブツンダンバがダライの使者と席を並べたことに対し、ジョーン・ガルのガルダンはダライに対する僭越であるとして、翌一六八七年大挙して兵をハルハに進めたというのである。⁽²⁹⁾

四

しかし、クレーン・ベルチルの盟にトウシヨートウ・ハーンが来なかつたという記述は、実録にも朔漠方略にも見られない。実録康熙二十五年十月戊午の条には、次のように述べられている。

理藩院尚書阿喇尼疏報、臣等於八月十六日、召集喀爾喀翼汗・及濟農台吉等、宣示聖諭、令其同歸於好。

……中略……、兩翼汗曰、聖意諱復、所以開示愚昧者甚至。我等敢不祗遵。臣等遂令兩汗・及濟農台吉等、於本月二十三日、檢選所屬才能寨桑六十余人、俱至噶爾賣西勒圖・沢ト尊丹巴胡土克圖前、設立重誓、兩翼互相侵占之台吉人民、令各歸本主、一切應結事件、俱審擬完結。

このハルハ両翼のハーンとは、明らかに左翼トウシヨートウ・ハーンと右翼ジャサクト・ハーンのことである。次に、ジョブツンダンバがダライの使者と席を並べたことを、ガルダンが僭越であるとしたという記述であるが、實際には第五代ダライ・ラマはこれより四年前の一六八一（康熙二十一）年に既に示寂していたのであった。ダライ・ラマの執權サンゲ・ギャムツォ（Sangs-rgyas rgya-mtsho）がこれを隠して発表しなかつたのである。⁽³⁰⁾

トウシヨートウ・ハーンは、自分の娘をオイラットのホショート部長オチルトウ・ハーン（鄂齊爾圖汗 Včirtu qan）の甥ロブサン・ゴンボ・ラブタン（羅ト藏滾布阿喇木坦 Lobsang gömbü rabtan）の嫁にしており、一六七七（康熙十六）年にはオチルトウ・ハーンがガルダンに襲われたのを助けて、ガルダンと事を構えるまでになつていた。⁽³¹⁾すでに一六七四（康熙十三）年、トウシヨートウ・ハーンがラサでガルダンと張り合つたことが、第五代ダライ・ラマの自叙伝に記されている。⁽³²⁾

ガルダンも、初代ジョブツンダンバ・フトウクトウも、共にモンゴリアに於けるゲルグバ弘通の役を担つていたのであるが、ジョブツンダンバとその勢力を頼みとするトウシヨートウ・ハーンがハルハで強大になりつつあつたことは、ガルダンにとって甚だ危険なことであった。また、彼等が清朝とより密接な関係を持つに至つたことも、ガルダンの望むところではなかった。ガルダンは一六八七（康熙二十六）年、予てよりの念願通りホショート部長

オチルトウ・ハーンを殺し、その衆を併せて自らドルベン・オイラットのハーン (*Dörben Oyirad-un qan*) と称して強大な勢力を有し始めていた。彼はダライ・ラマの名義の下に各部モンゴルを統一しようとも論み、ヘルハ侵入の機会を狙っていたのである。

しかし、清朝はこの時点ではまだガルダンの意図を正確には認識しておらず、この故、トウシエートウ・ハーンがジョン・ガルの侵攻を報じ迎撃することを清朝に請うた時も、あくまで両者の停戦を要求したのであった。が、ガルダンの勢力を清朝は軽視していたのであり、長く続いた内紛で分裂し、ロシアとの戦闘にも敗れて弱体化していたバルハは、ガルダンの侵入の前に一たまりもなかつた。

一六八七（康熙二十六）年秋、ジャサクト・ハーン・シャラ、デクデケイ（得克得黑 *Degdekei*）、メルゲン・アハイ（墨爾根阿海 *Mergen aqai*）——彼は一六八一年に和平と通商のための使者をイルクーツクに派遣した人物で、後にロシア国籍を得た——ことが知られている——、ダルマシリ・ノヤン（達爾馬西里諾顏 *Darmasiri noyan*）——清朝史料により右翼に属していることが明らかである——等がガルダンとの友好関係を維持するためジョン・ガルへ赴こうとした。このためトウシエートウ・ハーンは彼等を追跡し、会戦してこれを粉碎した。康熙帝は副尚書ペイリ（拜里）等を派遣し、勅命によつてトウシエートウ・ハーンが軍事行動を停止するようダライ・ラマに依頼した。清朝側はこの時まだ等五代ダライ・ラマの死を知らなかつたのである。⁽³³⁾ しかし、彼等の到着以前にトウシエートウ・ハーンはジャサクト・ハーン・シャラとデクデケイを捕えて殺してしまつていた。また、ガルダンの弟ドルジジャブ（多爾濟札布 *Dorjijab*）等が兵を率いてハルハ右翼の人畜を掠めたため、トウシエートウ・ハー

ンは娘婿ロプサン・ゴンボ・ラブタンと共に、ドルジジャブを追跡して殺したのである。ここに至つて、ガルダンはもはや躊躇することなく三万の兵を率いてハルハに攻め込んできたのであつた。

一六八八（康熙二十七）年春、ガルダンはハルハの西境から侵入し、ハンガイ山を越えた。トウショートウ・バーンは、息子ガルダンドルジ（噶爾丹多爾濟 Galdandorji）と共にテムル（必木爾＝特穆爾 Temür）地方でこれを迎え撃つたが、敗れてオンギ（翁吉 Onggi）地方に退却した。ガルダンは軍を分かれてショブツンダンバの居るエルデニ・ズー（額爾德尼招 Erdeni Juu）に配下の将を派遣し、自らはトーラ河を横切つてケルレン河の東に沿つて進み、チエチエン・ハーンの遊牧地を掠奪した。ジェブツンダンバは、兄トウシエートウ・ハーンの妻子を携えて初めチエチエン・ハーン旗下のエグムル（額古穆爾 Egümür）地方に居を定めたが、チエチエン・ハーンの牧地の掠奪されたのを聞き南奔して、スニット部の界に至つて清朝に急を告げたのであつた。七月壬申（二日）のことである。⁽³⁴⁾

同年秋、ガルダンはケルレン河より兵を返してトーラ河沿いの地域を掠奪した。一方トウシエートウ・ハーン・チャグンドルジは属下の衆をすべて集めてオロガイ・ノール（鄂羅奈諾爾 Olorai Nur）に至り、この湖畔で八月三、四日にオイラットとハルハの大決戦が行なわれた。三日に亘る戦いの後、敗れたハルハは潰散し、トウシエートウ・ハーンはゴビを越えてスニットの地に居るジェブツンダンバのもとへ逃がれてきたのであつた。⁽³⁵⁾

以上より明らかのように、ジューン・ガルのガルダンと戦つたのはトウシエートウ・ハーンを首領とするハルハ左翼であった。先に述べた如く、この時すでにハルハは左右翼に分裂しており、清朝帰属時のハルハを单一の結合

体と見ることは不可能である。すでに一六八四年の時点でトウシエートウ・ハーンと康熙帝の密接な結びつきがロシアに知られており、一六八五年からの露清六年戦争に於てハルハ軍は清軍と呼応してロシアの砦を囲んでいた。⁽³⁶⁾また、一六八七年秋にはジェブツィンダンバとトウシエートウ・ハーン等の合同使節団がウジンスクに到着し、ロンア使節ゴローヴィンにブリヤートの返還を再度主張し、トウシエートウ・ハーンはブリヤート問題について何度もスクワに手紙を送ったが何の返答も得られなかつたと不平を述べたという。一六八八年一月から五月までセレンギンスクを包囲したハルハ軍は、恐らくトウシエートウ・ハーン配下の軍であつたろう。⁽³⁷⁾このような状況下で、少なくともハルハ左翼に於てロシアに降るか清に降るか議論の余地はなかつたはずである。

それでは、ハルハの清朝帰属に於て我が国で常に語られてきた王公大會議の記述は、何を源としているのであるか。またクレーン・ベルチルの盟について、ポズドニエフは、

此ハルハを和睦せしめたる大事件を以て、ウンドゥル・ゲグーンの独力之をして、独りウンドゥル・ゲグーンの功に帰す。

と伝えているが⁽³⁸⁾、この時果してジェブツィンダンバの統率力はどれくらいのものであったのだろうか。

ハルハ王公大會議の席上でジェブツィンダンバが清朝帰属を決定したという記述は、ジェブツィンダンバの伝記と、松筠の『西陲總統事略』（一八〇九年）の中の「綏服紀略圖詩注」とにその源を発している。綏服紀略には、

康熙二十七年喀爾喀力微、不能抵敵、衆議就近投入俄羅斯為便、因請決哲布尊丹巴胡土克圖。時胡土克圖曰、我輩受天朝慈恩……中略……、而俄羅斯素不奉佛、俗尚不同我輩、異言異服、殊非久安之計。莫若攜全部内徙、

誠投大皇帝、可邀万年之福。衆欣然羅拜、議遂決。

とあるが、これに続いて次の記述が見られる。

余在庫倫時、有頭等台吉格、齊、多爾濟者、係固倫額駙敦、多、布、多、爾、濟、之、孫、年近八十、広記故事、哲布尊丹巴胡土克圖立意投誠一節、乃聞諸格、齊、台、吉所述。（傍点は筆者）

「」の中で格、齊、多爾、濟とあるのは、王公表伝によると格、斎、多爾、濟の誤りであり、またゲジャイドルジ（格、斎、多爾、濟 Gejayidorji）はドンドップドルジ（敦、多、布、多、爾、濟）の孫ではなく、第三子である。」のドンドップドルジは初代ジハソンダンバの兄トウショートウ・ハーン・チャグンドルジの孫であり、第二代ジヨブツンダンバの生父である。つまり、ゲジャイドルジは第二代ジヨブツンダンバの兄にあたり、初代ジヨブツンダンバの死亡時すでに十歳を越していたと思われる⁽⁴¹⁾のである。故に、自分の先祖のことを述べるのであるから王公大会議の記述も客観的真実とは言い難く、ジヨブツンダンバの伝記と源は同一と考え得る。蒙古游牧記がこの記述を引き、それを明治以降我が国の学者が引用してきたのである。

松筠が庫倫弁事大臣の職に在ったのは一七八五—九一（乾隆五十一—五十六）年のことであり、この時キャフタはすでに中露陸上貿易の大市場であった。李毓澍氏は、この乾隆末期頃のハルハの人々は、中露の間に在つてその対立に深刻な印象を持っていたため、清朝帰属の時点にまで溯つて清朝に依るべきかロシアに依るべきかといった情況を推測したのではないかと述べている。⁽⁴²⁾

清朝が早い時期からラマ教利用策を取り、ダライ・ラマのハルハに於ける名声を頼みとしていたことは周知の事

実であり、康熙帝はジェブツンダンバの宗教的地位を利用するつもりであった。しかしその初代ジェブツンダンバは、トウシエートウ・ハーン・チャグンドルジの弟であるという理由で、帰属以前ハルハ右翼に於てはほとんど宗教的権威は持つていなかつたと思われる。ジェブツンダンバが眞に全ハルハを率いる統率者となつたのは、清朝帰属後のことであつた。一六九一（康熙三十）年のドローン・ノール（多倫諾爾 Dolgoran Natur）の盟に於て、康熙帝はジエブツンダンバを大ラマの位に昇せ、彼にハルハの宗務管理を一任した。これより康熙帝はジェブツンダンバに礼を厚くし、ハルハ百官有司の首班として遇したといふ。その後一六九九年に至るまで、ジェブツンダンバは康熙帝と共に冬は北京に住み、夏は熱河に居住したと言われる。この間康熙帝は彼を非常に厚く遇し数多くの奇瑞を見たと伝記は伝えてゐるが⁽⁴³⁾、これはボズドニエフの言うように、モンゴル人の間にジェブツンダンバの高徳を広めるためであつた。⁽⁴⁴⁾ 一七一八（康熙五十七）年、康熙帝はジェブツンダンバを正式にハルハ黄教教主に封じたが、これらは彼がハルハの清朝帰属に功があつたからではなく、帰属後ハルハ統治のために康熙帝が利用したのである。

おわりに

ハルハ王公大会議によつてではなく、ジョン・ガルの大軍に隔てられたハルハの人々は各々算を乱して逃亡し、清朝の保護を求めたのであつた。そして、ガルダンと関係のあつたジャサクト・ハーンまでもが内蒙古に逃れてきた後、一六九一年にドローン・ノールに於てハルハ両翼の王侯達は康熙帝をモンゴル大皇帝に推戴し、新たに封爵を与えられた。ここに至つてついに外蒙ハルハは名実ともに完全に清朝に帰属したのである。

清朝帰属後のハルハは、以前のハルハ左翼が中心となつた。左翼からは土謝圖汗部、車臣汗部、後に賽因諾顏部の三部が設けられたのに対し、右翼からは個々に清に降つた者たちをまとめて、札薩克圖汗部ただ一部が設けられただけであった。残るハルハ右翼の人々の行方は不明である。

ロシア使節ゴローヴィンは、ネルチズスクに於て一六八八年十一月から八九年五月までにロシアの市民権を求めるジューーン・ガルからの多くのハルハ人亡命者を収容したといふ。⁽⁴⁵⁾ ウラジミルツォフは、ハルハの王侯達が清朝に帰属したのに對しサイト達がロシア国境へ走つたと述べている。⁽⁴⁶⁾ リヤザノフスキイによると、ハルハ人の一部、約千家族が北方に逃がれたという。⁽⁴⁷⁾ この問題については、いづれ稿を改めて論ずるものである。

（一九七九年六月二十日稿）（大阪大学大学院文学研究科博士課程）

略語表

実錄＝大清太宗文皇帝実錄

大清世祖章（順治）皇帝実錄

方略＝御製親征平定朔漠方略、一七〇八年。

表伝＝欽定外藩蒙古回部王公表伝（國朝著獻類徵初編卷首

所收）、一七八八年。

要略＝祁韻士『皇朝藩部要略』一八三九年。

蒙古游牧記＝張穆撰・何秋濤増補『蒙古游牧記』一八五九年。

シエブツンダンバの伝記（註ではJKUと略す）

十七世紀清朝帰属時のハルハ・モンゴル 宮脇

=Bawden, *The Jebtsun-damba khutukhtus of Urga, text, translation, and notes*, Wiesbaden, 1961.

註

(1) 要略卷三、一頁b、表伝卷五十三、一頁a。

(2) 同上、一頁b、表伝卷四十五、一頁a。

(3) 同上、二頁a、表伝卷六十一、二頁a。このジャサクト・ハーンの帰化城侵入については、彼が帰化城にいる漢人と貿易を行なうため隊商を率いて来たのが、誤って清朝に伝えられたらしい。青木富太郎『万里の長城』近藤出版社、一九七二年、二二〇—二二一頁。

(4) 實錄順治五年八月丁丑の条。

(5) 田山茂『清代に於ける蒙古の社会制度』文京書院、一九五三年、九八頁。

(6) 表伝卷六十一、札薩克団汗部總伝三頁aには、

先是、喀爾喀左右翼設ハ札薩克、諾爾布・及俄木布額爾德尼・車臣濟農・昆都倫陀音 各領右翼札薩克之一。

とあり、この中でノルブ（諾布爾）はビシレルトウ・ハーン、オンブエルデニ（俄木布額爾德尼）はロブサン・ノヤン、オンブエルデニ（諾布爾）はコジンの父である。ロシア史料によれば、オンブエルデニはこの時すでにその子エリンチンに譲位していたということであり、彼等三代にわたるアルタン・ハーンの子孫は一七〇九年（康熙四十八）年に札薩克団汗部中右翼末次旗を与えられた。またチエチエン・ジノン（車臣濟農）はグレセンジエの第二子ノヤンタイ（諾顏泰）一族出身で、一六九一年（康熙三十）年に札薩克団汗部左翼後旗を与えられた。

(7) 実錄康熙二十一年七月乙卯の条。右翼のブンチャク・タイジ（益楚克台吉）とダルマシリ・タイジ（達爾瑪希里台吉）は、スブディ・ジャサクト・ハーンの弟ウバンダイ（烏巴岱）の一族である。

(8) 実錄康熙二十五年四月乙酉朔の条。

(9) 田山前掲書、九四頁。

(10) 十六世紀初め、元朝の後裔ダヤン・ハーンはモンゴルを再統一し、その支配領域を子孫に分封した。ダヤン・ハ

ーンの八人の息子のうち第五子のアルジュ・ボラトと末子のゲレセンジエがハルハを相続した。アルジュ・ボラトの一人息子フルハチには五人の息子があり、彼等はそれぞれ「オトク」を率いたため、この子孫を「五旗ハルハ」或いは「ハルハ五部」と呼ぶ。一方ゲレセンジエには、一人の妃により七人の息子があつた。彼等は父の領地を分割相続したため、ゲレセンジエの子孫を「七旗ハルハ」或いは「ハルハ七ホショーン（オトク）」と呼ぶのである。

(11) 要略卷三、六頁ab、表伝卷六十一、三頁ab。

(12) 田山茂『蒙古法典の研究』日本学術振興会、一九六七年、一〇六頁、附団四頁。これに参加したハルハとオイラットの四十四の王侯の中には、トウシエリトウ・ハーンとチエチエン・ハーンの息子エルデニ・フンタイジの名が見られるが、この頃清朝史料に頻繁に現われるダンシン・ラマの名はない。彼のモンゴルでの勢力が清朝で扱われている程ではなかつたためではないかと思われるが、ここでは保留しておく。

(13) ゲレセンジエの長子アンハイの次男トゥメンダラ（國們達喇 Tümen-dara）の子シヨロイ・ウバシ（碩異烏巴什 Soloi ubasi）が、ロシア史料の中でしばしば言及されるアルタン・ハーンの初代である。その子オンブエルデニの孫エリンチンまで祖父子三代にわたって、彼等は宗主ジ

ヤサクト・ハーンに名目上従うにすぎなかつた。これら三
代のアルタン・ハーンについては、若松寛氏の一連の研究
が詳しい。

- (14) ポズドニエフ『蒙古及蒙古人』邦訳、東亜同文会、一
九〇八年、五九三—九五頁。ポズドニエフはジョブソンダ
ンバの伝記より引用したのであるが、ソノでは邦訳の文章
を利用した。JKU, Mongolian text 6r~7v, translation
and notes pp. 41~43.

(15) モンゴルのラマ教信仰によると、ジョブソンダンバの
転生化身は遠く釈尊時代に始まつたもので、その第十五代
ジョブソンダンバは『印度仏教史』の著者ターラナータで
あるといふ。彼は一五三七年チベットのワラング州にフビ
ルガム（転生者）として出現し、初めジョーナン寺に学び
三十歳の時グロン（比丘）の戒を受けた。のちモンゴル人
に招請されてモンゴルに赴き、若干の寺院を建立してモン
ゴルで入寂したといふ。橋本光宝『蒙古の喇嘛教』仏教公
論社、一九四二年、一一四一五頁。

- (16) JKU, text 9r, trans. p. 45.

- (17) 伝記によるとジョブソンダンバは一六四九年夏にチベッ
トに行き、そこで「の称号を得て一六五一年にハルハに帰
つたことになるが、実録順治四（一六四七）年五月己酉の
条には、

喀爾喀部落札薩克汗下俄木布額爾德尼、諾門汗下丹
津胡土克圖、土謝圖汗下沢ト尊丹巴胡土克圖等、貢方
物、宴賚如例。

とあり、またクドリヤフソエフ『ブリヤート蒙古民族史』
蒙古研究所訳、東京紀元社、一九四三年、八六頁には次の
ようにある。

一六四七年冬、ボハボフは庫倫へ着いた。彼はツェツ
モン汗の前に黒貂八匹と「イギリス製」の赤羅紗五
アルシンと深紅色の絨「アルシン」の進物を持参した。

蒙古宗教界の大喇嘛フトウフタ（胡土克圖）も矢張り
黒貂十二匹と「イギリス製」の羅紗二「アルシン」という
「皇帝の給与」を受領した。今度は汗とフトウフタが
モスクワのツアーリのために贈物を与え、ボハボフに

同行して四人の使者をモスクワへ派遣した。（傍線は
筆者）

これらの史料の正誤を今は明らかにはできないが、必ずし
も伝記に全幅の信頼を置くつもりはない。詳しい研究は將
來の課題としたい。

- (18) ポズドニエフ前掲書、六一〇~一一一頁。

- (19) ウラジミルソエフ『蒙古社会制度史』外務省調査部訳、
日本国際協会、一九三七年、四二九頁。
(20) クドリヤフソエフ前掲書、一一四~一二四頁。

(21) 当時のロシア—モンゴル関係については、残念ながら我国ではまだ一次資料を参照することができない。近年ソ連から「Материалы по истории Русско-Монгольских отношений I, II, 1959, 1974」が出版されたが、Iが一六〇七年、IIが一六三六—一五四年の資料集で、今後の出版を心待ちにする次第である。ルリヤー H.P. Шастина, «Русско-Монгольские походы и отношения XVIII века»,

Москва, 1958. (ズレ RMIO の略) に主として拠った。

文中のヘルバ、シャステイナ氏がモンゴル史料に拠った箇所である。

(22) RMIO, стр. 108-110.

(23) Там же, стр. 110-111.

(24) Там же, стр. 117.

実録康熙二十二年十一月壬申の条。

喀爾喀土謝圖汗・車臣汗・額爾克藏青台吉・墨爾根濟農、各遣子弟請安入貢、並口奏曰、去歲蒙皇上諭令各牧地、設立汛哨、以警寇盜。但我等就水草遊牧、居止不定、難以置哨。皇上限以何處為界、請遵旨而行。隨賜勅曰、爾喀爾喀等、向來不越噶爾拜瀚海之地遊牧。康熙三年七月内、爾等越界而來。朕念亂之所生、皆此之故。特頒勅旨、曉諭爾等部下屬衆、迨後喀爾喀、間有一二遠禁、來近境遊牧、以致逃盜紛紛不絕。故令爾

等設哨立界。今爾等既稱就水草遷徙、居止不定、難以置哨、請限以何地為界。可停其置哨。限以噶爾拜瀚海為界、不得越此遊牧。噶爾拜瀚海之地、距我邊境有三日程、其瀚海界之東、亦須離我邊境三日之地、不得入內。……後略……。

これが同われる。清朝は當時カビを自国の境界と見做していたが、

(26) 方略卷二、五頁a—八頁bには、チエチエン・ハーン所属のバルグ(巴爾呼)人がウジュュムチン部の領域に入り掠奪を行なつた際、内蒙古の領主達は清朝国内の八旗兵を使つてハルハとの国境防衛を強化することを提案したが、清帝は、誠意を持って朝貢し続けているハルハに理由もなく番兵を置くことは公平でないという口実のもとにこれを拒否したという記述が見られる。

(27) 要略卷三、八頁a—九頁b。当時の清朝—チベット關係については、Zahruddin Ahmad, Sino-Tibetan Relations in the Seventeenth Century, Roma, 1970. (Serie Orientale Roma, Vol. XL) (ズレ STR の略) が詳しい。これによると、アチュ・ゲンンは一六八四年三月十九日の勅令を持って夏にラサに到着し、八四年八月一日にラサを発つたという。また、セムバチョンボが帰化城で病死したのは一六八五年二月六日のことであった。STR, p. 264.

(28) 実録康熙三十五年四月乙酉朔の条。

(29) 要略卷三、九頁**b**、十頁**b**。

(30) STR, pp. 264-265. によると、康熙帝は再びアチト・ゲロンを派遣したが、彼は一六八五年五月十八日にラサに着き、六月二十六日にラサを去ったという。ダライ・ラマの自叙伝には次のように述べられている。

中国からハルハとオイラットの政治紛争の調停を求める請願があつたので、(ガンデン寺の第四十四代の座主) Khi rin-po-che blo-gros rgya-mtsho は行く。我同意したので、私は彼に(モンガリアに)無事到着するためには必要なことの詳細を与えた。私はわざと彼に Erdeni dalai sregetü qutuqtu の称号を与えた。
……後略……。

しかし、ibid., pp. 25-32. によると、実際には第五代ダライの自伝は第三巻までであり、一六八一年十月十八日以降の Supplement 〔=巻ば〕サンゲ・ギャムツォによって書かれたものであつたといふ。

(31) 要略卷三、七頁**b**、表伝卷四十六、一頁**a**。

(32) STR, p. 261. ダライ・ラマは、「私はじめらも不満を持たないよう和解させ、彼等が出会った時の位の高低を取り決めた」と記している。

(33) 清朝が第五代ダライ・ラマの死を知ったのは、一六九

六(康熙三十五)年のことであった。実録康熙三十五年八月甲午の条には次のようにある。

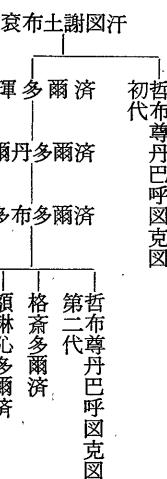
前略……。皆言達賴喇嘛、歿已九年矣。達賴喇嘛者、乃大普慧喇嘛。本朝為護法之主。交往六十余年。則其訃音、即當奏聞於朕。爾乃匿而欺衆、倚噶爾丹以興戎、其罪甚大。……後略……。

(34) 方略卷四、十五一二頁。

(35) 実録康熙三十七年八月丁卯の条。

(36) PMII, esp. 118. によると、一六八四年、トウショートウ・ハーンからの使節がコサックの略奪について不平を言い、ロシアの主権のもとに逃げたブリヤート人の返還を要求するためにロシアにやって来た時、使節は彼のハーンが康熙帝と密接な関係にあることを強調し、威嚇的に「語つた」という。へもしブリヤート人を返還しないなら、我々の以前の協定を協定とし、平和の約束を守らないならば、汝は我々の土地に住むことはできないし、汝の寨は存続し得ないであろう。康熙帝はトウショートウ・ハーンに「へその親愛なる人々は誰のものか」汝等のものか、それとも違うのか? という挑発的な問い合わせを課したということを、使節は後にロシア側に報じたということである。

(37) 吉田金一『近代露清關係史』近藤出版社、一九七四年、七八頁には次のようにある。



一六八五年のアルバジン攻撃の際は、明らかに清國と
ハルハ部の間には連絡があったものと思われる。とい
うのは清軍のアルバジン攻撃が六月十日に開始された
のに対し、その翌日の六月十一日にモンゴルの部隊が
セレンギンスクを囲み、ついでウジンスクを囲んだし、
その一週間前には国境にあるロシアのトゥンキン砦を
ハルハ部のツォン・ノヤンの一万の軍勢が囲んだだ
かるのである。

(38) PMHO, ctp. 124.

(39) ポズドリヒ前掲書、六一―11頁。

(40) JKU, text 9r, trans. p. 45, 緩服紀略図詩注、十四
頁。

(41) 表伝卷四十七、扎薩克多羅郡王噶勒丹多爾濟列伝には、
次のようにある。

(42) 李毓澍『外蒙政教制度考』中央研究院近代史研究所、
一九六一年、三六四頁。

(43) JKU, text 12v~20r, trans. pp. 49-59, ポズドリヒ
前掲書、六一五一―11頁。

(44) ポズドリヒ前掲書六一四一―五頁。

(45) PMHO, ctp. 149.

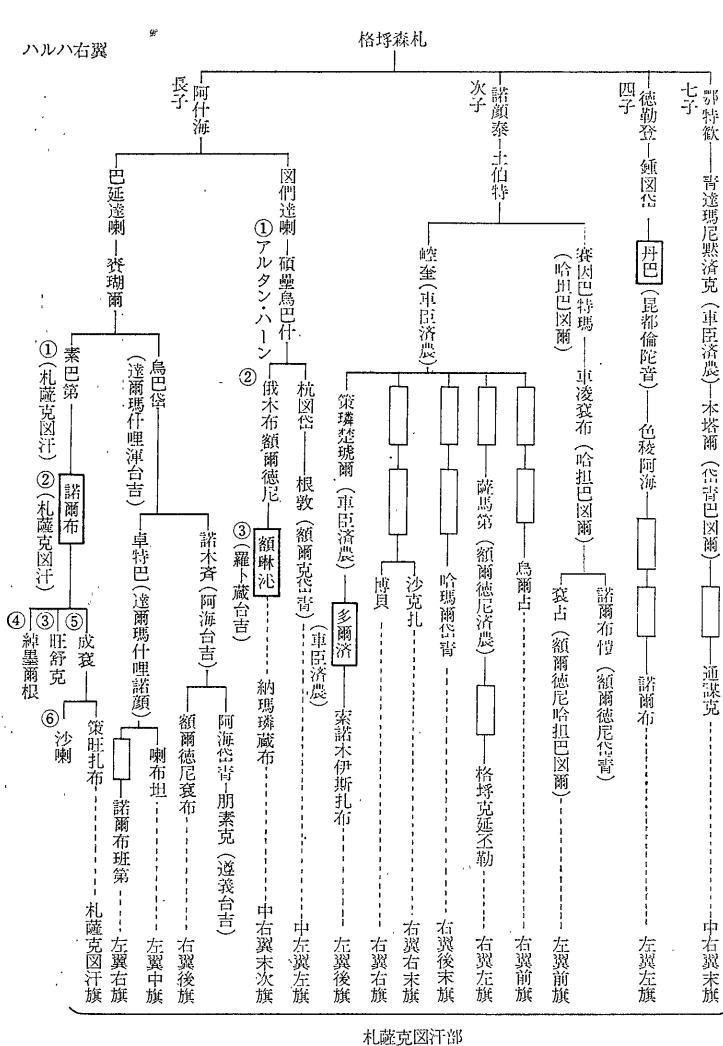
(46) ウラジーリツォフ前掲書、一九七頁。

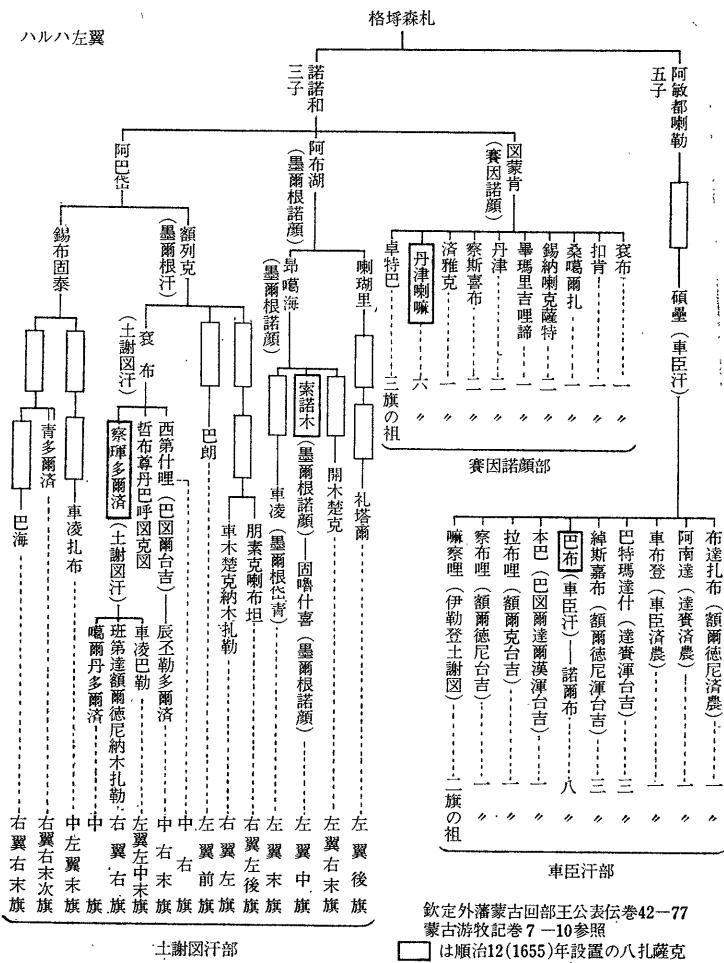
(47) リヤザノフスキイ・青木富太郎訳『蒙古法の基本原理』

年賜公品級襲札薩克、三十六年以病罷、改授一等台吉。
清門行走、十八年詔護視哲ト尊丹巴呼圖克圖、二十五

年賜公品級襲札薩克、三十六年以病罷、改授一等台吉。
生活社、一九四三年、七頁。

初代ジエブツンダンバは一七二三(雍正元)年示寂したの
であるから、一七八五十九一年すでに八十歳に近かつたゲ
ジャイドルジは、ジエブツンダンバの死亡時十歳は越して
いたはずである。





欽定外藩蒙古回部王公表伝卷42-77
蒙古游牧記卷7-10参照

□ は順治12(1655)年設置の八扎薩克